

한통련 뉴스레터

発行:在日韓国民主統一連合（韓統連）

〒110-0016 東京都台東区台東4丁目31-7-302 電話/FAX 03-4362-5284

ニュースター配信をご希望の方は chuo@korea-htr.org までご連絡ください。（メールにお名前をご記入の上、件名に「韓統連ニュースター配信希望」とお書きください）

国内各地で「私はチョンソンスラムです」上映開始!

12月9日より、いよいよドキュメンタリー映画「私はチョンソンスラムです（私は朝鮮人です）」が国内で劇場公開されます。公開に先立ち、日本から韓国問題研究所の康宗憲代表と金昌五事務長が、国内各地で開催されたプレ上映会に参加し、金哲民監督とともに広報活動を行いました。今回のニュースターでは、広報活動の写真と国内で扱われた記事の日本語訳を紹介します。 ※詳細な訪韓報告は今後のニュースターで掲載予定です。



仁川国際空港で金哲民監督と合流(12/2)



大邱上映会(12/3)



釜山上映会(12/6)



春川上映会(12/7)



仁川上映会(12/8)



ソウルでの公開初日(12/9)柔道の安昌林選手と(左から二人目)

国内記事紹介

●金昌五在日同胞「祖国の民主化、祖国の統一が在日同胞と直結する」

自主時報2021/12/06 キム・ボクギ通信員

「夢は空で眠り
思い出は雲を追い流れる
友よ、その姿はどこに行ったのか
懐かしい友よ

昔を思い出すたびに
私たちの失われた情を探す
友よ、夢の中で会おうか
静かに目を閉じる

悲しみも喜びも孤独もともにしただろう
膨らむ夢を抱いて明日を誓った
私たちの固い約束はどこに
夢は空で眠り
思い出は雲を追い流れる

友よ、その姿はどこに行ったのか
懐かしい友よ」



ペク・チャ常任運営代表のギターにあわせて歌う
金昌五事務長

「1987年の6月抗争の時、李韓烈烈士が亡くなった。その時、当時延世大学の学生をはじめとする人々が李韓烈烈士を追慕してこの歌をたくさん歌ったと聞きました。6月10日の国民行動の日、6月26日の国民大行進。26日に日時をぴったり合わせて、大阪領事館に対して抗議活動をしました。抗議活動の際に逮捕されたんです。15日間大阪拘置所にいましたが、拘置所の中では面会も禁止で新聞も読めませんでした。世界との経路は唯一、12時に流れるNHK放送、ラジオ放送だけでした。ニュース放送で聞きました。「長い間生死の境界をさまよっていた延世大学李韓烈学生が死亡した」瞬間、独房で泣き続けました。そんな記憶があってこの歌が格別です」

「民族委が会う」2番目の主人公は「私はチョソンサラムです」に出演した在日同胞の金昌五先生だ。私はチョソン

サラムです」の金哲民監督も共にし、ペク・チャ自主民主平和統一委員会常任運営代表が進行を担当した。金昌五先生は現在、韓統連（在日韓国民民主統一連合）事務長を務めており、日本で長く統一運動をしてきた人士だ。

涙が流れ、また涙を流して

行きたいと願ってきた故国の土地を踏めなかった彼に、機会がやってきた。彼は「海外民主人士の名誉回復と帰国保障のための汎国民推進委員会」の努力によって、2003年9月19日、ソウルの地を踏んだ。これまで日本を訪れた人士たちが「次はソウルで会いましょう」と言っていたが、それがつい実現したのだ。韓国に行く前日、推進委員会執行委員長のイム・ジョンイン弁護士と話しました。

（中略）その時、イム弁護士が最後に話した言葉が「明日ソウルで会いましょう」。その瞬間涙が出ました。長い間「次はソウルで」といつつ10年、20年、30年がたったのに。「明日ソウルで会いましょう」

ソウルを訪れる日の朝、顔を洗いながらも涙を流し、電車の中で娘の手紙を見ながらも涙を流し、飛行機の窓から見た祖国の地を見ながらも泣いて。空港に到着しても人々を見てもまた泣いて。どの瞬間でも涙だったのはじめての故国訪問。金昌五先生はどのようにして統一運動に立ち上がったのだろうか？

生涯民主と統一のために生きる

金昌五先生は中学校時代まで母国語を全く分からなかったという。

彼は朝鮮人だということを隠して生きてきた。大学に入った1974年8月、6歳上の兄に呼ばれた。兄は「8月15日に東京の光復節集会に一緒に行こう」と提案してきた。金昌五先生は朝鮮人だということを隠して生きてきて、そのような問題に関心がなかったので「絶対に行かない」と言った。その当時は日本と中国が国交正常化された直後であり、中国政府が友好の象徴として日本にパンダを送り、上野動物園にパンダがやってきた。そこで金昌五先生の兄は「東京を一緒に行けば、上野動物園に行ったらパンダを見せてあげる」と再び誘い、金昌五先生も「それなら行く」と応えた。彼が東京に行った理由は光復節集会ではなく、パンダを見るためであった。

東京の光復節集会場に入った金昌五先生はとても驚いた。彼は「熱気が並大抵ではなかった。壇上ではおじさんたちが、私が理解することもできない韓国語で熱を帯びた演説をしていました。聞いてみると祖国の将来、民主化、統一、そのような話をしていました（隣の方が説明してくれました）。私はびっくりしました。私が知っている朝鮮人は貧しくて、肉体労働をして、疲れた体で安い焼酎をたくさん飲んで・・・粗暴で貧しい姿でした。それとは全く違った姿を見て、衝撃を受けました。「ああ、こんな世の中があるんだ」。その日を契機に在日韓国青年同盟（韓青）に参加して初めて韓国語を勉強し始めました。

彼は歴史学習、特に4・19革命を通じて学んだことが多かったという。金昌五先生は「同じ年齢、同じ年頃の祖国の学生たちがこのように生きているのか」と考え、「私は生涯、民主と統一のために生きると決心した」という。勉強すればするほど祖国に対する愛が深くなったという。

黄色いリボン

対談では、映画で金昌五先生を見た人が、印象深かったことに関する話も交わした。

黄色いリボン。今でも彼の胸には黄色いリボンがついている。映画のインタビューをする時も特に目を引いたのが黄色いリボンだった。多くの人がこれに注目したという。

「朴槿恵政権の時、最も独裁政権のために被害を受けた方々が、セウォル号惨事の時の学生と遺族でしょう。しかし、当時は朴槿恵政権下だったので本当に難しい闘争、警察・機動隊の弾圧を受けながら黄色いスカーフ、黄色いシャツを着て闘争をしていたでしょう。その姿を見てとても感動しました。

「私たちも共にしなければならぬ」といいながら連帯闘争をしてきましたが、セウォル号惨事の遺族の方々の闘争が、結局はキャンドルデモに発展したのではないのでしょうか？ そのような意味でキャンドル革命の主人公は、私はセウォル号惨事の遺族たちだと考えます。そうした方々と連帯しなければならぬ。そのような気持ちで常にリボンをつけています」。

彼が映画で「韓国の民主化、祖国の統一が在日同胞と直結する」といった話も非常に注目された。

これに対して金昌五先生は「日本で在日同胞が民族差別を受けています。このことが今では当然のように考えられていますが、1945年祖国が解放された後は、南にしようが、北にしようが祖国の地にいる同胞は朝鮮人、韓国人ということを利用して迫害を受けなくなりました。唯一、植民地宗主国（日本）で生きている在日同胞だけが70年以上、朝鮮人ということを利用して差別と迫害を受けています。その苦痛はいつ終わるのか？それは統一された祖国が日本と対等な関係、お互いが本当に尊重する、そのような時代がきてこそ民族差別のない社会が実現される。そのような意味で祖国の分断の最も厳しい被害者が在日同胞であり、祖国統一の最も大きい恩恵を受ける存在が在日同胞だと考えます」。

対談では統一が個人の希望ではなく、在日同胞、民族すべてに必ず必要なことだと確信する金昌五先生と多様な話をする事ができた。

金昌五先生が出演した映画「私はチョンソンサラムです」は12月9日に封切りを迎える。

12月9日午後7時30分、インディスペースで映画上映後、進行される「監督との対話」で彼とまた会うことができる。この日「監督との対話」には、キムジョグァンス監督の進行で金哲民監督、金昌五先生、柔道の安昌林選手が出演する。

記事のもととなった対談をYouTubeで視聴できます。下記リンクからご覧ください

<https://www.youtube.com/watch?v=2HbNRIVDItQ&t=2584s>

●在日朝鮮人、どうして彼らを愛さずにいられようか？

自主時報2021/12/07 イ・ヘジン（ノレペ「ウリナラ」歌手）

映画を劇場で3回見ました。

何度見てもいつのまにか没入するようになる、また自然と涙が流れるようになる映画。こんな映画が他にあるのでしょうか？在日同胞を扱った多くの映画がありますが、こんなに深い余韻を与える映画は初めてです。淡々と笑って話す主人公たちを通して、本当の幸せとはなんなのか、本当の希望とはなんなのか考えるようになる映画、「私はチョソンサラムです」。ぜひ劇場でご覧ください。

在特会が発する差別と嫌悪の言葉が無防備に露出され、映画は始まります。生まれてから一度も聞いたこともなかったような、あらゆる侮辱的な言葉の暴力の前になすすべもなく、怒りで顔が膨れ上がります。このような暴力的な現場を映像で生々しく見守っていると、長い長い年月、私たちの同胞たちがどんな扱いを受けて日本で生きてきたのかと、胸が締め付けられます。いまだ植民地日本から解放されていない同胞たち。映画は始まりから私たちを在日朝鮮人の社会の中に力強く引っ張ります。

在日朝鮮人

映画に登場する主人公たちは、一様に一つの時代を全身で生きてきた歴史の主人公たちです。朝鮮総督府で勤務した特殊な経歴にもかかわらず、独立運動に飛び込み刑務所に閉じ込められる経験までしたソ・ウォンス先生。学問に秀でた娘をピョンヤンの金日成総合大学に先に送り、日本で背負った借金を返済すれば、すぐに追いかけるはずだったが、やむをえない事情により日本に留まったというブ・マンズ先生。二人とも解放後、母国語を教える学校を建て、守り、育てるのに大きな役割を果たした同胞一世の方々です。その方々の努力は、その後数多くの同胞を朝鮮人として育てる役割を果たします。幼いリョンセを常に抱えて通う姿で出てくる、京都第3初級学校の校長であるカン・スヒャン先生も、子供たちを堂々としたチョソンサラムとして育てるために、定年を越えても自分の使命を尽くします。

私を探して

淡々と在日朝鮮人の歴史を聞かせてくれる映画は、第2章の「私を求めて」で観客を衝撃に陥れます。柔らかな印象の主人公たちが、一様に「スパイ」という恐ろしい罪目で連行され、あらゆる拷問に遭ったというシーンは、何度も見ても慣れません。そして主人公たちの証言は、観客の涙を誘います。

「大韓民国は反共を国視とする国家だ。したがって、被告カン・ジョンホンのような朝鮮のスパイは生存を許すことができない」「日本社会の差別が嫌いで生きてみようかと訪ねてきた祖国なのに、生存を許すことができないという言葉聞いて、本当に悲しかった」と笑みを浮かべながら話させるカン・ジョンホン先生の言葉には、耐えきれず多くの涙を流しました。24歳という青春の年齢で監獄に閉じ込められ、死刑囚として六年、無期囚として7年を過ごし、37歳になってやっと世に出るようになった先生の人生。その遥かなる歳月の前に、何を言うことができるでしょうか。ただ流れる涙を拭うしかありませんでした。

二つの祖国

第3章で最も印象的な方は、なんとといっても金昌五先生です。パンダを見るために上野公園に行こうというお兄さんの勧誘で、初めて在日同胞たちの集会に参加した青年金昌五は、その日に祖国の未来を論じる在日同胞青年たちの姿に魅了され、韓青活動を始めるようになります。南の民主化闘争の歴史を学び、祖国をとっても愛するようになったという先生。それで、夢の中でも南の土地を好きたくて、もどかしい思いをしたという先生は、行けない南の地を思い、こう言われます。

「祖国を愛すれば愛するほど祖国が遠くなる」

先生はピョンヤンで開かれた1990年の汎民族大会に参加することになり、心の中に描いた南の地だけが祖国ではなく、北の地も祖国ということに気づくようになります。北の地に初めて足を踏み入れた日に、飛行機の中から声を出して泣いたという先生を見ると、観客たちも自然に涙を流します。

唯一、同胞たちにだけ加えられる過酷な選択、いつも南なのか北なのか、両者の中から一つを選ぶというような暗黙的な強要の前に同胞は一途でした。

「両方です。どちらも。南と北、朝鮮半島全体が私の祖国です」

「私はチョソンサラムです」

その言葉が南も北でもない、一つになった祖国が私の志向であるという同胞たちの宣言のようです。

チョンサラムとして生きるため

第4章ではチョンサラムとして生きるために今日も闘っている同胞を描きます。おそらく日本でチョンサラムとして暮らすということは、人生のすべての瞬間が闘争になるということの意味するかもしれません。しかし、代を継いで闘っている朝鮮学校の学生たちの姿は、全くくたびれて見えません。むしろ活気があり、学生たちの顔から朝鮮民族の気概と誇りがあふれています。不思議なことに、日本の地で闘争を続けている先生の顔にも笑顔がいっぱいです。やりたい運動をして、一緒にいる同志たちがいるから幸せだと言うキム・チャンオ先生、死刑を言い渡されて13年間悔しい獄中生活を続けてきたが、その時代を学ぶことができ、貴重な経験だったと言うカン・ジョンホン先生。私の人生を平凡な他人の人生と変えたくないという言葉は、時代的な使命の中で真の人生のやりがいを見つけた人だけができる高い境地を感じさせられました。



上映会後の交流会で歓談する金昌五事務長（左）とイ・ヘジン歌手（右）

映画は在特会の暴力から始まりましたが、闘う人たちの笑顔を経て、平昌五輪での南北の一つになった応援で幕を閉じます。

時代錯誤的な者たちの差別と嫌悪、そして時代の中で自分の使命を見つけた者たちの高い自覚と生きがい。映画の終わりには、このような違いが特に鮮明になります。必ず笑って闘って、南北が一つになる明日を作る人、怒りながらも憎むことのない人生を送る人。

「私はチョンサラムです。」この叫びは、おそらくあの植民地時期、日帝に立ち向かった私たちの先烈たちの闘争から来たのかもしれませんが。その時から今まで、外勢に立ち向かい民族性を守り、その中で人生のやりがいと幸福を見つけた尊い人々の人生があるから、私たち民族の前に輝く統一の明日が開かれているの

ですから。

そして同胞は、その淡々とした笑顔で言います。私たちは分断の最大の被害者ですが、統一の最大の恵みを受ける人々です。

「祖国の土地は70年前に解放されたが、唯一、植民地宗主国の日本の地に住む在日同胞は解放されなかった。祖国が統一してこそ在日同胞も解放される」という金昌五先生の言葉のように在日同胞は統一を最も切迫した問題として受け止め、最も熾烈に闘っている人たちです。

「祖国」の土地に生まれ、「分断」を実感できずに生きている南の私たちに、「統一」がどれほど価値があるのかを教えてくれる人々、一生を捧げて統一のために生きていくことが、どれほど大きな幸せかを教えてくれる人々、怒りながらも憎むことのない境地を70年間の生活と闘争によって見せている人々、在日朝鮮人。彼らをどうして愛さずにいられるのでしょうか？

12月9日公開する映画「私はチョンサラムです」を通じて、愛するしかない人々、在日朝鮮人たちにぜひ会ってみてください。

●ジェノサイドあるいはディアスポラ、そして在日チョンサラムたち

民プラス 2021/12/08 キム・グァンス政治学博士

映画「私はチョンサラムです」試写会に行き



キム・グァンス博士

私は文化芸術に関する理解はとんと疎い。にも関わらず意味のある映画や演劇などは必ず観覧しようとする。なぜなら文章で得られないインスピレーションのようなものを、常に私に与えてくれるからだ。

12月9日から上映される「私はチョンサラムです」という映画を、共同体映画上映形式で6日に観覧した。チケットは知人の助けを借りて購入し、上映館に到着すると100人ほどの客がいた。知っている人もいたので短い挨拶を交わし、静かに映画を見始めた。

結論として私はこの映画を見ている間、終始彼ら…在日チョンサラムに「申し訳なさ」と私自身に向かう「居心地の悪さ」を感じていた。「申し訳なさ」とは、私自身、自主統一運動ひとすじで実践活動を熱心にやってきたと自負してきたが、彼ら…在日チョンサラムの差別的な生活と統一に対する熱望を観念的に理解していたと私自身が認識していたことに気付いたためだ。彼らにとって統一とはスローガンでも「抵抗」でもない、人生と運

命そのものだったということだ。

「居心地の悪さ」とは、そのような彼らの人生を、知っていながらも目をつむろうとした私の「黒い羊効果」*のためだった。知っていれば同意しなければならず、同意すれば行動しなければならぬため、むしろ「目をつむる」ことで正当化した卑怯な自分自身を見つけてしまったからだ。

*黒い羊効果…自分の属する集団に対する優越評価と、集団の中の異端者を自分の属さない他の集団よりも低く評価し排除しようとする心理。

上映を通じて広く知られるであろう、在日チョンソンスラムたちの言葉にできない差別について分かち合い、共にできる方法が過去の「キャンドル」ではなく現在の「野火」として立ち上がれば、という小さな願いを込めて観覧を終えた。

映画に対する所感



映画「私はチョンソンスラムです」のポスター

映画は90余分にわたって日本社会での在日チョンソンスラムの差別的な体験・境遇を扱う。だが、その先に祖国統一へ向けられた格別の願望と祖国愛が込められた「栄光の」人生があり、それを越えた「幸福」がある。

個人的な人生なら決してそうしなかっただろう。個人と社会、国家と民族、分断と統一、そういったもので覆われた社会的ネットワークの中で、自分たちの人生を「今日の個人」ではなく「明日の集団」として見てきた。そして集団の中で自分たちの幸福と理想、志向性を見つけて来たからこそ、かれらは過酷な差別と嫌悪、祖国の裏切りにさえ耐えてきたのだろう。分断と国家保安法、統一すらもかれらにはそのように近づいてきた。

ここまですべてが彼らの人生に対する共感であれば、次は大韓民国に向けた「怒り」である。

次のセリフにすべてが込められている。38度線以南の大韓民国が故郷の主人公、在日同胞金昌五先生は作中で「私が祖国（大韓民国）を愛すれば愛するほど、（国家保安法のため）祖国が離れていく」と語った。

何が彼らをそうさせたのか？治安維持法と国家保安法は一卵性双生児だ。祖国留学を通じて「忘れていた」自分のアイデンティティを見つけようとしたが、むしろ大韓民国という祖国は「留学生スパイ捏造事件」を通じて自分たちを部外者に仕立て上げ、生きる権利さえ徹底的に奪った。ある判事の判決文だ。「大韓民国は反共を国是とする国家だ。したがって、被告康宗憲のような朝鮮のスパイは生存を許すことができない。（康宗憲先生の回顧の中で）

結果、そのように捨てられた彼らの人生は、「チョウセンジン」と馬鹿にした日本に差別を正当化する言質を作り出した。いかに残酷なことを大韓民国はしてきたのか。

私は以下のように結論づける。在外同胞及び在日チョンソンスラムたちの差別の責任は、日本を責める前に祖国の息子・娘たちを受け入れられなかった歴代大韓民国すべての政府にある。これからはその過ちを百回でも繰り返して反省し、彼らが堂々と民族的生活を営むため、大韓民国政府は数百倍の努力を惜しまず、問題解決のために日本との直談判に訴えなければならない。

そこまですなければいけない十分な根拠と責務もある。「南と北は国際舞台で民族の利益と海外同胞の権利・利益のための協力を強化していくことにした」（10・4南北共同宣言第8項）それにも関わらずもたもたと時間ばかり無駄にしている大韓民国政府に向けては、市民社会が団結し、国民的な同意と大衆的な怒りを基に批判・牽引し、すでに政治争点化している「チョンソンスラム差別問題」を全朝鮮民族の力量で突破する知恵を導き出さねばならない。

10・4南北共同宣言合意文を復活させることがその近道である。南北合意文履行闘争（国会批准闘争を含む）を組織化して政府を最大限圧迫し、国会批准できるようしなければならない。この映画はまさにその呼び水だ。過去のジェノサイド（虐殺）とディアスポラ（離民）、それらの真ん中に存在する今日の日本ジェノサイドを克服する道だ。